1496号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2025.6.23
〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

39

二千年十月六日に起きた鳥取県西部地震はマグニチュード七・三。日記には記載が続く。

十月八日「今朝は六時過ぎに揺れた。一日家で待機。…（中略）…夜九時頃大きいのがあった。西伯で五弱だから伯太も大きかっただろう」

十月九日「雨である。どうかなと思って出勤したら、ちゃんとビニールシートが割れ目に罹っていた。管理職＋主任さんのようだ。町へ出て様子を見た。道路わきが壊れたり、瓦がズレて落ちそうだったり、ガラスや壁が割れたり壊れたり。やはり大変な様子。保育所は修理不能。井尻までいかねばならないとのこと。午前中揺れは二、三回。でも、こんな中で勉強できないだろうと、明日一日臨休措置に」

十月十日「午前中家で待機。十二時に家を出た。学校はやはり余震で揺れる。地震かなと思ったのだけで五、六回はあった。…（中略）…十時前にまた地震。マグニチュード四・六。震源地は島根県東部というから伯太あたりか。米子、境港、西伯で四というから伯太もだろう。瓦が落ちてないかなあ。明日はじまるけど心配だ」

余震が怖くて、同僚の校務技師さんは相当な期間車の中で夜を過ごされた。地震当日、お孫さんの世話が必要となって休みを取り、寝かせた隣で横になっていたところ、突然の揺れで二人の枕元にテレビが落っこちてきたのだそうだ。その時の恐怖が消えないのだという。

夕焼け通信三五一号、十月九日の編集後記にはこう書かれている。「今も余震が続いています。だんだんと間隔が開いてきたので、このまま終息に向かうかと思ったら、日曜日にちょっと大きい揺れがありました。そのあとまた余震が頻発しています。…（中略）…静穏だった五十年が終わり、西日本は地殻の活動期に入ったと言われます。たまたま静穏期と高度経済成長が重なったために今の日本ができたということらしいです。少々無理してもつくるってことでこれまでやってきたわけですが、これからはこわれるかもしれないからと考えて、なるべく無理しないっていうのがいいかもしれませんね」

南海トラフを控え、日本中いつどこで地震や大災害が起きるかしれないというのに、使用済み核燃料の処理さえままならない中、原発の再稼働が進み、耐用年数を六十年にまで引き延ばそうとしている。これって、少々どころか相当の無理、いや無謀ではないのだろうか。

座付きの雑記　8

宮森健次

本の始末

今にしてみればどうかしていたというほかないが、就職してから二十年あまり、私の趣味は読書ならぬ買書だった。読書もしていたがそれに追いつかぬ量の書籍を購入していた。給料をもらう前は、買いたい本をどう我慢するかに悩んでいたので、生活費のさしてかからぬ環境で、月々学生から見ればたいそうな額をいただくようになり、完全にたがが外れてしまった。徐々に蒐集癖は収まっていったが、処分には関心がなかったので相当量たまってしまった。

二十年ばかり前、手狭な住宅に引っ越さねばならなくなり、これらの始末に頭を抱えたが、救いの手をさして延べてくれた人があった。使っていない離れがあるからそこに置いたらよい、と。もともと茶室にでも先代がこしらえた風流な佇まいで、風通しもすこぶるよいので、ここを図書館にしたらすてきじゃないかと思いついてしまった。おもしろがってくれる人も少なからずあったので、私の蔵書とそれをうんと上回る書籍の持ち込みで、図書館と名乗って遜色ないくらいになった。

しかし、二十年経てばどうなるか、それを考えてこなかったツケはここへ来て年々強度を増し、ついに先送りを許さないところまで来てしまった。いつまでも年古るままにしておけず、処分する以外の選択肢はないのだが、問題はその処分方法だ。

今ひとつ気になりつつも手が付けられなかった最大の理由は、これぞという処分方法がみつけられなかったからである。からんで古紙として出す、ネットの古本業者に送る、ブックオフに持ち込む、などを考えていたが、どれもそれにかかる手間を考えるとどうにも体が動かないのだった。

ところがここでも救いの手。草取りボランティア仲間とのおしゃべりから偶然、松江の某ＮＰＯの存在を知った。寄付された古本は、スタッフがきれいにしてネットや契約店舗で販売し、売り上げはすべて障害者支援に充てられるというのだ。我が家から近いこともあって話を聞きに行くと、選別などはこちらでするから、ただ持ち込んでくれればいいと言う。いくらかでも金になればなどという考えはとうの昔にどうでもよくなっているし、死蔵に等しい本たちが一部なりともだれかに読まれ、だれかの支援につながるならば、それに越したことはない。

かくして、自動車に積めるだけ積んで件のＮＰＯに通うこと三度。まだ終わらない。スタッフの皆さんの心からの「ありがとうございます」を報酬に、四度目に臨む。

30代フリーター　イスラエルがイランを先制攻撃し、交戦が続いている。G7首脳はイスラエルの自衛権を支持する共同声明を出し、事態はイスラエルの思惑通りに進んでいるようだ。

年金生活者　覇権国家＝「世界帝国」の座からずり落ちつつあるアメリカは、世界支配のための政治的、軍事的、経済的な諸システムが逆に重荷になり始め、トランプはそのためのリストラを急いでいる。その一環として中東からも次第に手を引き、対立する中国に対して力を集中したがっている。

それと対照的に、欧州はEUという「地域帝国」を維持しようとしている。「帝国」の特徴は域内だけでなく域外でも権力を行使するところにある。英独仏がイスラエルのガザ攻撃を非難したのは、権力行使そのものではないが、「帝国」としての姿勢を示そうとしたものと推察される。

そんな中でのイスラエルのイラン攻撃は、トランプ政権のリストラにブレーキをかけ、欧州からの非難も消し飛ばした。

30代　ネタニヤフ政権の聞く耳を持たないかたくなさに同盟国も友好国も手を焼いているように見える。

年金　イスラエルは自分たちユダヤ人への迫害が極点に達したホロコーストを、いま自らの手によってガザで繰りしている。そこでは虐待の世代間連鎖が国家規模で起きていると言える。

30代　なぜそんなことが起きるんだ。

年金　フロイトの反復強迫の概念を借りて考えると、人間は過去の苦痛な経験を無意識的に繰り返そうとする。虐待を受けた子供もその経験を反復しようとする。自分で自分を虐待することはできないので、親になったとき、わが子を自分に見立てて虐待する。

二度としたくないはずの苦痛な経験をなぜ繰り返すのか。苦痛な経験だからこそ、苦痛でない経験としてやり直そうとする無意識の動機が働いていると考えられる。経験のやり直しが元の経験と違うのは、時間的には心の準備ができること、空間的には距離をおくことができることにある。言い換えれば、耐えがたかった元の経験を耐えられる経験に置き換えることができる。ユダヤ人にとって、ホロコーストはその種の経験に属する。

30代　連鎖を止める手立てはないのか。

年金　虐待はフロイトのいうエディプスコンプレックスの克服の破綻でもある。エディプスコンプレックスは、幼児が母と交わることを願い、そのために邪魔になる父を殺害しようとする無意識の衝動から始まる。だが、子は父による去勢の脅しに屈して、母と交わることをあきらめ、代わりにいつか別の相手と交わるために、父のようになりたいと願うようになる。母子相姦を子に禁じる父は法の体現者でもあるので、子は法に従うことを受け入れる。そこで一種の取引が成立する。

だが、もし父が去勢の脅しにとどまらず、虐待にまで及べば、子は一方的な譲歩を強いられるだけで、そうした取引は成立しない。子は母をあきらめることができず、父のようになりたいと思うこともない。つまり法に従おうとはしない。親になったとき、法に背くことをいとわず子を虐待する。

もし「虐待」を「尊重」に置き換えて、エディプスコンプレックスの克服を経験し直せば、虐待がなかったことと同様の状態、あるいはそれに近い状態をつくることができるのではないか。戦後の欧州は、それと意識せずに、その状態をつくろうとしてきたと考えることができる。

30代　欧州は何をした？

年金　統合への歩みはその最大のものと言える。それが行き着いた先がEUという「地域帝国」だ。「帝国」は域内にさまざま勢力を抱えているため、分権的な統治にならざるを得ない。つまり「帝国」の特徴は「多様性」にある。欧州の統合はそのシステムの中にユダヤ人の居場所をつくり、敬意を持って彼らを遇することを意味した。

しかし、「帝国」の域外の中東ではそれができなかった。パレスチナ人を追い出して「国民国家」をつくるイスラエルの建国はたちまち領土をめぐる対立を引き起こした。領土は「国民国家」の生命線であり、その侵害はナショナリズムのエスカレートと戦争につながる。中東は「帝国」の論理とは対照的な「国民国家」の論理がむき出しになる最前線となった。

ニュース日記　973

中村　礼治

イスラエルの行動原理

30代　イスラエルの振る舞いは植民地主義とも批判されている。

年金　国民の平等をうたう「国民国家」は内外に「同質性」を強いる特性を持つ。それが外に向かってエスカレートするとき植民地主義となる。ユダヤに負い目を持つ欧州はアメリカとともにそれを容認した。

それでも、イスラエルによるガザ攻撃に対してはさすがに非難の声を上げざるを得なかった。ところが、イスラエルがイランを攻撃し始めると、パレスチナ国家の承認まで表明していたフランス大統領のマクロンは手のひらを返し、イランを攻撃したイスラエルの自衛権を支持した。

ロシアのウクライナ侵略は非難して、イスラエルによるイラン侵略は擁護する二重基準は、論理的に導かれたものではなく、ユダヤ人迫害に加担した欧州のトラウマが反応したものと考えられる。それがいまなお克服されていないことがあらためてあらわになった。